

戸田吉三郎作品の考察

戸田吉三郎は自らの強い意志のもと、作品だけを残した画家です。鑑賞者自身の目と心を持って「ただ観られること」を望み、自身の経歴や時代背景から分析されることはもちろん、自ら絵について語ることも決して好まなかったと言います。テーマや制作年号も追えない作品も多く、解釈のヒントとなるような資料もほとんど残されていません。考察には困難な画家だと感じますが、実際、氏の絵を前にすると、解釈や評論という概念が打ち碎かれます。山々のように雄大な空気を帯びた裸婦から漂う、静けさと温かみ。粗い線で描かれた女から立ち上る生と死の気配。その感覚を言葉にすることはとても難しく、言葉にするという行為自体が無駄なことに思えてくるのです。

戸田吉三郎が生涯にわたり描いたのは裸婦でした。近しい間柄の女性を描いたものも、単なるモデルもあります。ヨーロッパやメキシコ絵画の強い影響を感じる部分も多々あります。東京美術学校（現在の藝大）を卒業し、渡仏。洋画の基礎を学んだ経歴から考えても、テーマとして裸婦を選ぶことに何ら疑問はありませんが、なぜこれ程までに繰り返し描き続けたのか…。しかも同じような構図を繰り返し描いています。そもそも裸婦画は解釈の難しい題材だと感じます。女性の肉体を神格化する西洋的な美意識と性的な匂いが混じり合ったものも多く、時代によって意味や解釈も大きく変わってきます。さらに性別を超えて「裸」というモチーフ自体が持つインパクトはとても強い。それ故にインスタントに話題を巻き起こすような表現も可能です。実際に1960年代に盛りを迎えた日本の前衛芸術では、自らの裸体を晒す美術家・表現者も多く見られました。

ご家族の話を知ると、戸田吉三郎は繊細な洞察力を持ち合わせていた人物だったと感じます。氏の画力と観察眼を持ってすれば、鑑賞者や時代のニーズに応え即時的に話題を生むような裸婦を描くことも可能だったはずですが、しかし戸田吉三郎はそれを一切許しませんでした。裸婦につきまとう世俗のイメージを悠に超えたものを描く。そこには「本当のことを描く」という一つの覚悟が見え隠れします。

その覚悟をうかがわせるエピソードとして、戸田吉三郎は家族に「自分は絵を通して真理を追求している」と話すことがあったそうです。そういう絵でない違和感を覚える、人が無理矢理に作り出したものではないいけない。宇宙を感じるようなものでなくてはならない、と。今も戸田吉三郎のアトリエには、自ら墨で書いた詩のような言葉が残されています。私とは何か、他者とは何か、愛とは何か、正しさとは何か、正義とは何か、罪とは何か、無限とは何か。その言葉たちは、自身の理想の生き方と現実の狭間でもがく、悲痛な叫びのようでもあります。真理を追うには美化された側面をなぞるだけでは不十分です。多くの人が目を背けるであろう、やり切れない事実や真実に触れ、考え続ける覚悟と胆力が求められます。戸田吉三郎は裸婦を通して、その極限の追求に挑んでいたのかもしれない。

戦争を経て国家そのものが揺らぎ、あらゆる価値観が崩れ、経済が急拡大し、絵画の在り方そのものも大きく揺れた時代の中で、戸田吉三郎は苦行と背中合わせの「真理」を求め、ただひたすら描き続けました。氏の作品に宿る独特の静けさは、そうした苦しいまでの自問自答の先に生まれたものなのでしょう。ひとりの画家の頑ななまでの決意が生んだものを前に、鑑賞者も「私」という個に立ち戻るほかにありません。作品に関する情報も批評も取り払い、描かれた裸婦と一対一で向きあった時、「私」は何を感じるのか。それはまさに鑑賞者の目と心で「ただ観ること」であり、「絵を観るという行為そのもの」でもあるのだと戸田吉三郎は伝えているように感じます。